

(第3種郵便物認可)

人間は旅人である。旅をしなから歴史をつくるが、その旅路は人間を育て精神的に豊かにする。すべての旅のうちで最も優れたもの、それは神への心の旅(結城了悟)。

沖縄で開かれた学会から長崎へ帰ってきた翌日。前日には、春一番が吹き、二月とは思えない暖かな日曜日。浦上にある自宅から西山、そして玉園町を抜け寺町までゆつくりと足を延ばした。梅の蕾(つぼみ)が芽吹くなか、のどかな時間が流れていた。そんな折、ふと気が向いて入ったのが二十六聖人記念館。二十年ぶりくらいのことだった。そこで出会ったのが文頭の詩。題名が「旅」とあった。もちろん、神への心の旅をするほど高尚な人間でないことは自分で



やまもと たろう 山本 太郎

旅

もよく分かっている。しかし、ここ十年ほど世界のあちらこちらを旅し、そんなとき、「旅」についてそして「時間」について考える

ことがあった。だからだろうか、「旅」と題したこの詩にひかれた。旅をするということは、空間を追遡(しゅうよう)しようと思った以上に、時を旅したいと思うことなのかもしれないと思うことがある。しかし、どんなに「時を旅すること」を切望しても、人が時を旅することはできない。そんな時、人は未知の空間へ旅に出たいと思うのかもしれない。未知の空

間で出会う異文化に擬似的な時間の旅を重ね合わせようとするのかもしれない。聞けば、結城は一九二二(大正十一)年スペイン・セビ

リア地方に生まれ、四八(昭和二十三)年来日しその後の人生を日本で過ごしたという。そこには大きな人生の旅があったに違いない。

早春の長崎港は蒼(あお)く空はどこまでも晴れ上がっていた。そのとき三日ほど前に五歳の誕生日を迎えた息子が「世界中の子供が一度に笑ったら、空も笑うだろう。海も笑うだろう。世界中の子供が一度に泣いたら、空も泣くだろう。海も泣くだろう」と歌いだした。父親譲りの音痴は別として、その無邪気な声に、なんだか急に目頭が熱くなった。  
(長崎大熱帯医学研究所教授)